

災害のあと

墜落



青色のグラスに珈琲を注いでいるとき、黄色いグラスのことを忘れてた。つか珈琲じゃなくて水が飲みたいかも。

もうすぐ二十歳になる二月。統合失調症による妄想・幻覚・幻聴が出て神奈川県精神病棟に措置入院した。（精神科には「任意入院」「医療保護入院」「措置入院」があり、措置入院は国からの強制入院だ。）措置入院をするにあたって、措置鑑定というものが行われる。医者二名がデスク越しに座っていて、警察官が私の後ろに座っていた。「父親に殺されるんです。」と言うと、医者は「疲れているね。」と言う。私は何故か少しホッとして「そうなんです、ちよっと疲れてるんです。」と言った。事実、このところ両親が離婚するとの報告を受けたり、美大に通って制作しつつバイトの日々で疲れていた。だから病識なんてものはなかった。すると医者は私に色紙を渡した。きょんとしていると、警察が後ろから呟く。「入院ってことだよ。」

そのまま連れて行かれた先は、大きな二重窓のある無機質な部屋だった。その部屋には毛布、マットレス、トイレ（むき出しの）とペーパーだけが置かれていた。隔離室と呼ばれる場所だ。私はそこで一週間と少し過ごすことになるが、記憶はほぼない。

大部屋に移ってノートとペンが許可されてからはよく絵を描いた。真っ黒に塗り潰されたグラス

や雲、人物、丸など。その後、心理テストの結果が出たので見せてもらったが、絵を描くテストで木を黒で塗りつぶしていたことから自閉傾向があると診断されていた。

あーあ、柱サボテン折れた。たくさん話していれば、折れない未来を一緒に考えられたのに。雨がたくさん降っているけど、それは外のことで、柱サボテンには無関係だった。

入院して数週間経ったころ。両親と主治医と私で退院後について話し合うカンファレンスが行われた。両親と主治医の意見は、留年して休養を取ることだった。「大学で周りの人に恵まれたんだ、それは嫌だ。」と伝えると、主治医が「彼女の人生で周りの人に恵まれたという話 wasn't なかった。このままの進学を考えてほしい」と両親を説得してくれて、そのまま進学できることになった。話合えてよかった。父親が別れ際「死ぬこと以外かすり傷だよ。」と言う。ドア閉めてから感情がぐちゃぐちゃになって泣いた。私はあんなに殺され・・・。

そうだ、震災のときは仙台にいて、小学六年生だった。まだまだ子供だ。そして周りには皆生きていた。だから不謹慎だけど正直、非日常が楽しかった。その例として、ミニチュアみたいな車が道路のルールを無視して置かれていること。

入院生活も非日常であるが退院の日だけが希望であり、ずっと苦しかった。絵を描いてあるノー

トの一番最後のページに自作カレンダーを作り、一日が終わると数字を消した。カンファレンスまで退院の日は未定だったが、そうやって終わりが来ることを実感していた。ついに退院の日、親が迎えに来る午後一時までにソワソワしすぎてにうんこ四回した。

二十六歳になった今、統合失調症という呪いから解放された。治ってはいない。じゃあ何が一番変わったか、病気ではなく、己で生きている実感がある。己の足で地を踏み歩いている。ズンズンと。風を感じる。シユアシユアと。生きていることが本当に嬉しい。

なぜバタバタと死んでいく。あなたは狂った俺ですか。死んではいけないというのは、きみ、必ず、必ず良くなるときが来るからです。